

英語のリモート授業におけるスピーキング活動とフィードバックの試み

及川賢 埼玉大学教育学部言語文化講座英語分野

キーワード: 英語、スピーキング、フィードバック、リモート、オンライン

1. はじめに

本稿は英語のスピーキング力向上を目的とするリモート（非対面）授業における3つの活動と受講者のパフォーマンスに対するフィードバックの実践報告である。

大学の授業が講義中心であると批判をされるようになって久しいが、その欠点を補う手法として、アクティブラーニングや反転学習など様々な実践が報告されるようになった。これらの授業形態では、受講者は単に授業者の講義を聞くだけでなく、演習などを通じて課題等に取り組み、より主体的に授業に関わることを通して、学習すべき内容の理解や習得が期待されている。このような動きは大学に限ったことではない。平成29年度告示の学習指導要領では「主体的対話的で深い学び」がキーワードの一つとなり、小中学校、高等学校でも授業方法の改善が望まれている。

英語の授業でも学習者が授業者の説明を聞くことのみが中心の授業ではなく、何らかのパフォーマンスを行い、それを通して目標とする知識や技能を習得することが期待されている。例えばライティングなら、良い英文の書き方の講義を受けたり関連の書籍を読んだりするだけでなく、実際に英文を書いてみるというパフォーマンスを通してライティングの力を向上させることが期待されている。

また、このように学習者がパフォーマンスを通して目標となる力を付けるには、このパフォーマンスへのフィードバックが欠かせない。良いところを褒めたり、改善が必要なところを指摘したり、望ましいパフォーマンスを示したりするなどの方策が必要となる。フィードバックは受講者の学習の質を高める重要な手段であると言える。

筆者が担当する英語の授業でもこれまで様々な形でスピーキング活動やフィードバックを実施し、受講者の英語力向上に寄与するよう努めてきた。しかし、2020年度は新型コロナウイルスの影響でこれまでと異なる形での授業方法やフィードバックが必要になった。受講者に直接会うことができず、リモート環境での授業には様々な制約があったが、受講者の協力などもあり、最終的には普段とほとんど変わらない形で実施できた。また、今回の実践を通して新たな形態を採用することになり、結果として方法の幅が広がることになった。本稿では、この実践とフィードバックに対する受講者の感想等を報告する。

2. 背景

本学部の言語文化講座英語分野では受講者の英語力、特に教師として十分な運用力を育成する目的で、「現代英語」という授業を設置し、筆者が担当している。教育学部の学生向けに開講している授業で、総コマ数は15（試験用のコマは除く）である。受講者は英語分野の学生が中心で、特に中学校コース英語分野の1年生と小学校コースの英語分野の2年生に履修を勧めているため、英語分野の学生は全員が受講している。英語の運用力、特に音声面の技能を高めることが目標なのでLL教室を使用しており、同室の最

大の収容人数である 30 名が最大受講者数である。主な活動は以下の通りである。

多読：用意した約 300 冊の英語の本（graded readers のようにネイティブの児童向けの簡単なものが中心）の中から受講者が好きなものを選び、授業外の時間を利用して読む。

Book Report：多読活動で読んだ本の中から 1 冊を選び、約 3 分で概要を英語でペアの相手に伝える。

Debate：英語教育に関するテーマについて英語でディベートを行う。

Mini Lecture：自分が詳しいテーマについて 5～10 分の講義を英語で行う。

Jigsaw Comic：4 人 1 組での活動で、4 コマ漫画をバラバラにして 4 人に 1 枚ずつ配布し、各自が絵の内容を英語で伝え合い、元の順序を当てる。

One day course：全員参加の英語訓練コース。授業外の時間を利用している。丸一日、日本語が禁止で英語以外を話すことはできない。様々な活動を通じて受講者のスピーキング力向上を図っている。

このうち、Book Report、Debate、Mini Lecture で毎年フィードバックを行っている。その様子は及川（2013a）で報告している。及川は上述の「現代英語」と英語の教科教育法の 2 つの授業でのビデオカメラを利用したフィードバックの実践を報告している。「現代英語」の報告では、ほぼ毎週実施している Book Report で、ビデオカメラで撮影した受講者のパフォーマンスにフィードバックをする方法を詳細に報告している。当初は受講者のパフォーマンスに対し、発音や語彙のミスを中心にメールでコメントを送っていたが、授業外で多くの時間を要することと、発音等を文字でコメントすることに限界があったと報告している。また、DVD-ROM に受講者の映像を録画し、その映像を受講者に渡し、受講者が自分で視聴する機会も作った。DVD-ROM は繰り返し録画ができるので、それを受講者と授業者がやり取りをして繰り返し使っていたが、受講者が失くしたり、実際には視聴できなかつたりしたことがあった。そこで、授業外の時間を利用して受講者に来てもらい、映像と一緒に見ながらその場でコメントする方式に変えたところ、後日のアンケートで好意的なコメントが多く寄せられた。Debate や Mini Lecture でも同様に受講者のパフォーマンスを撮影したが、受講者を授業外に集める時間を確保することが難しく、文字によるフィードバックを実施した。

しかし、2020 年度は新型コロナウイルスの影響で授業がリモートになった。例年「現代英語」は前期の 4 月から 8 月に開講しているが、2020 年度は前期の授業がリモートと決定した段階で後期に移動した。スピーキングが中心の内容なのでリモートでは授業の効果が薄れると判断したのと、その段階ではコロナ禍が後期開始までにある程度収束している可能性があると考えていたためである。しかし、7 月に本学が後期もリモート授業を継続することを決定したため、Zoom を使ったリアルタイムでの授業を行うことになった。受講者を登校させることはできないため、授業内容とフィードバックの一部をリモートに対応した方法に変更した。以下で Book Report、Debate、Mini Lecture でのこれまでの授業方法及びフィードバックとリモートでの授業方法及びフィードバックを報告し、受講者へのアンケートの結果も併せて報告する。なお、アンケートは全授業終了後に Google Form を利用して実施した。回答者は 20 名中 9 名で回答率は 45%であった。

3. Book Report（フィードバックは Zoom でのリアルタイム）

3-1 例年の実施方法

前述の通り、この活動は受講者が英語の本を読み、その内容を3分程度の英語でペアの相手に口頭で伝える活動である。各回で受講者の半分が本の紹介者 (Reporter) で、もう半分が聞き手 (Listener) になるため、各受講者は2回に1回の頻度で順番が回ってくる。例年は以下の手順で実施している。

- 1) 用意した約300冊の英語の本 (graded readers のようにネイティブの児童向けの簡単なもの) の中から受講者が好きなものを選び、授業外の時間を利用して読む (多読)。
- 2) Reporter は読んだ本の中から1冊を選び、その内容を3分で伝える紹介文を英語で用意する。英文をすべて書いて準備をする受講者もいれば、要点だけ決めて、本番で英語にする受講者もいる。
- 3) Listener が Reporter の紹介に対し1分で質問やコメントをする。この合計4分間が「第1ラウンド」である。
- 4) Listener が移動し、ペアが変わる。Reporter が新しいListener に本を紹介し、Listener が質問・コメントをする (第2ラウンド)。
- 5) 再びListener が移動してペアが変わる。Reporter が本を紹介し、Listener が質問・コメントをする (第3ラウンド)。

すなわち、Reporter は同じ本を3回紹介し、Listener は3冊の本の紹介を聞くことになる。Reporter は同じ本を3回紹介するので、1回目、2回目、3回目と回を重ねるごとに上達していくことが期待される。

2010年度まで、Book Report は第3ラウンドが終わったところで終了し、フィードバックは行っていなかった。しかし、受講者が話す英語をさらに伸ばすには、フィードバックが不可欠であると考え、2011年度から、Reporter のパフォーマンスをビデオカメラで撮影してフィードバックを始めた。第3ラウンドが終了したところで、Reporter の2人に1台の割合でビデオカメラを渡し、もう一度本を紹介して、その様子を互いに撮影してもらった (その間 Listener は多読用の英語の本を静かに読んでいる)。撮影には約10分を要した。全員の撮影が終わったところでビデオカメラを回収し、その日の次の活動に移るが、その間、撮影した動画を授業アシスタントが授業者のPCにコピーをした。その後のフィードバックの仕方は及川 (2013a) で紹介した通りで、当初は試行錯誤を繰り返していた。

2013年度からはフィードバックを完全対面に変更した。Reporter に一人ずつ研究室に来てもらい、授業で撮影した動画を一緒に見ながら授業者がコメントをした。コメントは主に発音や語彙選択などに関するものである。一人に約10分を要した。授業外の時間を使うので、毎週授業以外に120~150分が必要である。各自のフィードバックの時間は授業が始まる前に各 Reporter とメールのやり取りをして決めておいた。フィードバックのあとは、受講者の了解のもと、この動画を動画サイトにアップロードし (YouTube の「限定公開」)、受講者がもう一度自分のパフォーマンスを視聴して振り返りを行い、気が付いたことをメールで授業者に送信した。

3-2 リモート環境での授業方法

2020年度は授業がリモートでの実施となった。これまで受講者は授業者が所有する多読用図書から毎週各自が好きな本を借りて読んでいたが、今回は原則として受講者が大学に来ることができないため、有料・無料の多読サイトを紹介したり、家が近い受講者は一時的に入構して借りたり、希望する受講者には郵送したり、あるいは、受講者が個人で所有している英語の本を利用したりすることで、受講者が読む機会を確保した。毎年10万語の読書量を目標として読ませていたが、今年はこの目標を大幅に下げて3万語と

した。

毎回、受講者の半分が読んだ本の内容を紹介する Reporter となり、もう半分が Listener となった点はこれまでと変わらない。全 15 回の授業のうち、オリエンテーションや Debate、Mini Lecture の回を除いて、Book Report は合計で 10 回行ったため、各受講者は Reporter を合計で 5 回担当したことになる。

本を読んで内容を 3 分程度の英語にまとめるというところや、Reporter と Listener がペアになり相手を 3 回変えるというところはこれまでと同じだが、これを Zoom で実施しなければならない点が大きな違いであった。具体的には、Zoom の「ブレイクアウトセッション」を利用した。ブレイクアウトセッションとは、Zoom 上で参加者を複数のグループに分ける機能で、イメージとしては、ネット空間に「部屋」を作り、各グループがそれぞれの部屋に入って活動をする状態である。ブレイクアウトセッションを利用した具体的な手順は以下の通りである。なお、2020 年度の受講者は 20 名であった。

- 1) 「ブレイクアウトルーム」を 10 部屋用意する (第 1~10 室)。
- 2) 各部屋に Reporter と Listener を一人ずつ入れる。
- 3) 全員が各部屋に入ったところでスタートの合図を送る。
- 4) Reporter が自分で選んだ本の内容を英語で Listener に 3 分で紹介する。
- 5) 3 分経ったところで授業者が合図を送る。次の 1 分で Listener が英語で質問をしたりコメントしたりする (第 1 ラウンド)。
- 6) 全員がメインルームに戻る。
- 7) ペアを変えて、Reporter と Listener を各部屋に送る (第 2 ラウンド)。以下は第 1 ラウンドと同じ。
- 8) 再びメインルームに全員が戻ったのちに、ペアを変えて本の紹介を行う (第 3 ラウンド)。

ラウンドごとのペアの交代は受講者ではなく授業者が行う (授業アシスタントが担当)。授業前に受講者に各自の名前 (表示名) の前に付けてもらう数字を授業者が指定しておく。Reporter は常に同じ部屋にいたので、例えば、第 3 室を割り当てた受講者には表示名の前に「3」を付けて授業に参加した。Listener が部屋を移動する形になるので、例えば、第 1 ラウンドが第 3 室、第 2 ラウンドが第 4 室、第 3 ラウンドが第 5 室という Listener は表示名の前に「345」を付けた。ブレイクアウトルームで部屋を割り振る場合は「手動」で行うのだが、表示名の前に数字を付けておくと、受講者が部屋ごとに並ぶため、短時間で部屋の割り振りが可能となる。また、Listener は第 1 ラウンド終了後に先頭の数字を削除するよう指示が出るので、第 2 ラウンドの部屋割りを行うときには、自然と次のペアと一緒に並ぶようになり、作業がスムーズであった。ちなみに、後に分かったことだが、Zoom のブレイクアウトセッションには参加者が自分で各部屋を移動できる機能が 2020 年 9 月に追加されていた。この機能を使えば、メインルームに戻る必要がないので、よりスムーズにできたかもしれない。

3-3 リモート環境でのフィードバック

昨年度までは、第 3 ラウンドが終わった段階でビデオカメラを使い、Reporter 同士がパフォーマンスを録画していたが、今回はそれが難しい状況であったため、Reporter は授業後に各自で自分のパフォーマンスを録画して授業者に送るよう指示をした。録画にはスマホや PC の録画機能、Zoom の録画機能などを使ったようだ。録画した動画はメールに添付をしたり、One Drive や Google Drive にアップロードをして URL を授業者に送付したりする受講者がほとんどであった。

フィードバックは対面ではなく Zoom によるリアルタイムで行った。スケジュールは、事前に受講者の希望を聞き、決めておいた。受講者に送ってもらった Book Report の動画を再生し、発音や語彙・表現で気になったところで止めて指導をした。必要であれば、その場で発音の練習もした。Zoom には画面共有機能があり、授業者の PC で再生する動画を共有することができるが、映像がコマ送りの状態になったり、音声途切れたりすることが多かったため、ウェブカメラを2台用意し、1台は授業者の顔を映し、もう1台は受講者のパフォーマンスを映したテレビモニターの画面を映した。このほうが、動画がスムーズに流れた。

3-4 受講者の感想（アンケート結果）

Book Report のフィードバックに関する質問を3つ用意した。それぞれの質問と回答は以下の通りである。

質問1. Book Report の feedback (Zoom でリアルタイム) はあなたの英語力 (発音、文法、語彙、英語表現等) や発表技術の向上に役立ったと思いますか？

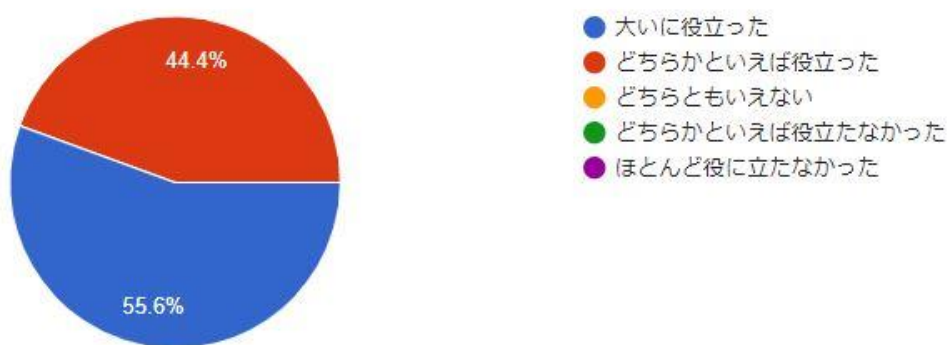


図1 Book Report のフィードバックの有用性

9人中「大いに役立った」が5人、「どちらかといえば役立った」が4人で、回答者全員から肯定的な評価を得られた。

質問2. 【複数回答可】上記の1の質問で「大いに役立った」「どちらかといえば役立った」と回答した方への質問です。feedbackによりどの力が向上したと思いますか？「その他」の場合は具体的にお願いします。

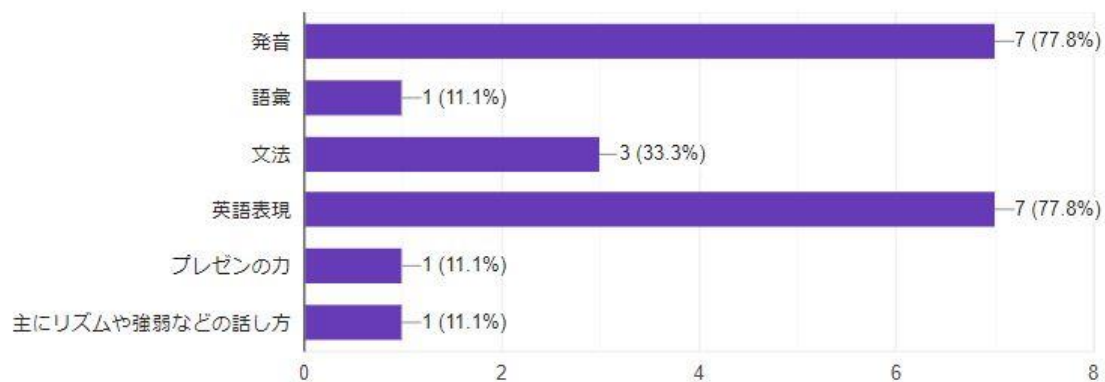


図2 Book Report のフィードバックで役立ったこと

「発音」「英語表現」を挙げる受講者が多い。これは、実際に指導した内容の多くがこの2点であったことと一致している。

質問3. 【自由記述】Book Report の feedback (Zoom でリアルタイム) について感想をお願いします。【一言でもいいのでお願いします】

「自分が今まで間違っで発音していた英単語を指摘して頂けるので、自分の間違いに気づくことができる良い機会でした。また、間違っで使い方をしていた文法についても、正しい表現とあわせて教えて頂いたので、すごく勉強になりました。」

「動画を見ながらなので的確に改善すべき点を知ることができた。ただし、発音がちゃんと先生に伝わっているのか分からなかった。」

「個人的に時間をいただき、指摘をもらうことで、自分の弱点を知ることができた。」

「毎回少ない時間で丁寧にコメントしてくださったのが印象的でした。語彙や発音で自分が気づけなかったことを訂正してただけでとてもためになったと感じています。」

「ビデオを見直しながら振り返ることができたため、どこが良かったか、どこが改善点かが分かりやすかった。また、その場で発音をチェックしてもらうことができ、対面で行っているような感覚で feedback を受けることができ良かったと思う。」

「feedback を頂くことで自分が気づけなかったミスや、思いつけなかった表現に気づくことができた。」

「『自身がこういった意図でこの表現をした』ということ伝えることができるので、良い仕組みだったように感じる。」

「少人数の授業といっても、一対一で指導して下さる授業は今までなかったので、とても勉強になりました。自分の発音を客観的に見て聴きやすいかどうか見直す大切さを知りました。」

(明らかな標記ミスは修正してある)

全体的傾向として「自分」や「自身」という表現が目立つ。内容としては、自分では気づかなかったミスを指摘してもらった、あるいは映像で気づいた、という表現が目立った。

3-5 授業者から見た長所・短所

第一の長所は、学生は映像を何度も撮り直すことができる点である。これまでは、授業内で撮影していたので、失敗をしたと気付いてもやり直しができず、映像をそのまま提出する以外になかった。撮り直しを通して受講者はパフォーマンスの質を高めることができるので、成長の可能性を広げることになる。

撮影時間を授業外に設けることで、10分程度ではあるが、授業時間の節約につながる。また、これまでは撮影が早く終わるペアと遅くなってしまふペアの時間差が大きいことがあった。他の受講者は本を読んでいるので、最後まで撮影をしている受講者の声だけが教室内に響き、やりにくそうな場面もあった。

受講者は研究室に来なくていいので、時間の融通が利き、他の授業がない隙間時間なども活用できる。

短所は、接続の不具合があった場合にフィードバックができなくなるという点である。また、動画を共有しながらのフィードバックなので、映像や音声の具合が悪いと正確に伝わらない可能性がある。

しかし、総合的に見れば、長所が短所を大きく上回っており、授業が対面に戻った場合でも、この方式の継続が可能であると思われる。

4. Debate（フィードバックは文字）

4-1 例年の実施方法

英語によるディベートは毎年行っている。テーマは小学校での英語教育に関するものが多く、「すべての公立小学校で英語を教えるべきである」「すべての公立小学校で英語を教科として教えるべきである」等の命題で実施した。

形式は2チーム対抗で、各チームは2または3名。日本語でもディベートをしたことがないという受講者がほとんどなので、下記の通り簡易的な流れで行っている。一つの「試合」の所要時間は約30分である。

- ① 第1スピーチ（肯定側→否定側の順、各2分）【英語で行う】
- ② 作戦タイム（3分）【日本語で行う】
- ③ 第2スピーチ（肯定側→否定側の順、各2分）【英語で行う】
- ④ 作戦タイム（3分）【日本語で行う】
- ⑤ 質疑応答（否定側が肯定側に質問→肯定側が否定側に質問、各3分）【英語で行う】
- ⑥ 作戦タイム（3分）【日本語で行う】
- ⑦ 最終スピーチ（否定側→肯定側の順、各2分）【英語で行う】
- ⑧ 判定【英語で行う】

ディベートには、命題があらかじめ示されている準備型とその場でサイドを割り振られる即興型があるが、この授業では準備型を採用している。

まず、過去の受講者の映像を見せて、これから自分たちが取り組む活動の概要をつかんでもらう。その後、小学校での英語指導について2~3人の小グループで自由に意見を出し合う

ディスカッションを英語で行う。この活動を通して受講者にテーマへの理解を深めてもらうことが目的である。

その後、受講者の希望をもとに全体を肯定側（Affirmative Side）と否定側（Negative Side）に分け、さらにそれぞれの中で2人または3人のチームを4つずつ作る。各チームで自分たちの主張を支持するデータを集めたり、論の展開を考えたりしたのちに、2チーム対抗で「練習試合」を行う（試合の様子はビデオで撮影する）。そして、次の回に対戦相手を変えて本番となる試合を行うが、その間に授業者がビデオを見て各チームにフィードバックのコメントを送る。授業者からのこのフィードバックや自分たちの反省をもとに各チームが次へ向けて改良を行う。

Debateでのフィードバックは個人別ではなく、1つの試合全体についてフィードバックを行うので、その試合に参加した2チームのメンバー全員に同じコメントを送る。全部で4試合になることが多いが、その場合、授業者が送るフィードバックは4つである。チーム別にフィードバックを送ることも考えられるが、対戦チームから学ぶことも多いので、この形にした。なお、次の回の本番の試合ではそれぞれが別の部屋の別のチームと対戦するため、練習試合の相手チームへのフィードバックを受け取ることに問題はないと考えている。

この時のフィードバックは、授業者からのアドバイスを「書いて」、すなわち「文字」で行う。英語のミスに対するフィードバックはもちろん、論の展開の仕方や用意したデータの扱い方などディベートの進め方に関するアドバイスも含んでいる。

4-2 リモート環境での授業方法

2020年度のDebateは他の活動と同様にZoomで実施した。テーマはこれまでと同様に小学校における英語指導の是非を問うものだが、2020年度から小学校の外国語（高学年生対象）が教科になったことを受け、その逆を主張する「日本のすべての小学校で英語を教科として教えることを辞めるべきである

（“Teaching English as a subject should be stopped at all the elementary schools in Japan”）」という命題のもと、英語でディベートを行った。試合の流れは4-1で紹介したものと同一である。

例年は過去の受講者のディベートのビデオ映像を見せて参考にしてもらうのだが、オンラインでのディベートは前例がないので、英語分野の4年生4名の協力を得て、「日本の中学校・高校は給食をやめるべきである（All secondary schools in Japan should stop providing lunches for the students.）」というテーマで模擬ディベート動画を事前にZoomで作成し、授業内で受講者に視聴してもらった。

その後、受講者の希望をもとに全体を肯定側と否定側に分けて、さらに2～3人のチームの8つ作った。各チームで準備を進めた後に、練習試合を行い、その後、本番の試合となった。これらの手順は従来と変わらなかった。

オンライン授業のため、Zoomのブレイクアウトセッションを利用して実施した。ブレイクアウトセッションで部屋を2つ作り、各部屋に4つのチーム（肯定側が2チーム、否定側が2チーム）を入れた。このうちの2チーム（肯定側と否定側が1チームずつ）がまず試合を行い、他の2チームのメンバーが司会やタイムキーパーや審判を務める。次の試合では役割が変わり、先ほど試合を行った2チームが司会や審判を務めた。2つの部屋でこれらを同

時進行で行う。4つの試合の様子すべてを録画し、フィードバックの対象とした。

私からのフィードバックを踏まえて各チームは改良を施し、本番に臨んだ。練習試合と同様にブレイクアウトセッションで実施した。手順等は練習試合を同じであった。

4-3 リモート環境でのフィードバック

Debate の場合、文字によるフィードバックであったため、方法は例年と同じであった。

4-4 受講者の感想（アンケート結果）

Debate のフィードバックに関する質問を3つ用意した。それぞれの質問と回答は以下の通りである。

「4. Debate の feedback（メッセージ（文字）で）はあなたの英語力（発音、文法、語彙、英語表現等）向上に役立ったと思いますか？」

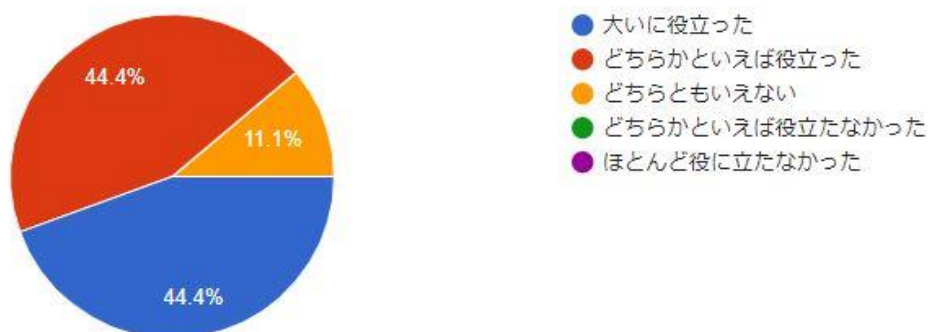


図3 Debate のフィードバックの有用性

ここでは「大いに役立った」「どちらかといえば役立った」が4人ずつで、「どちらともいえない」が1人であった。概ね肯定的な回答結果であったと言える。

「5. 【複数回答可】上記の4の質問で「大いに役立った」「どちらかといえば役立った」と回答した方への質問です。feedbackによりどの力が向上したと思いますか？「その他」の場合は具体的にお願いします。」

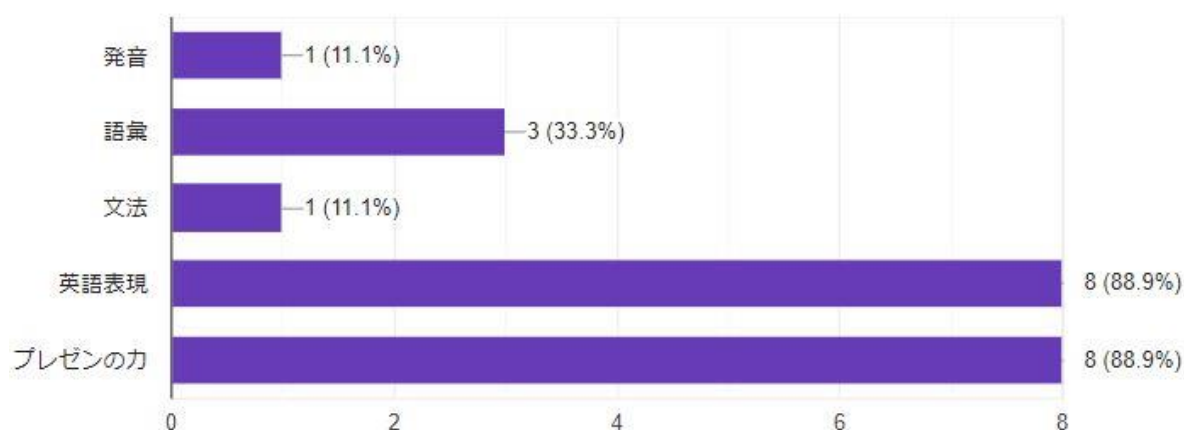


図4 役に立った項目 (Debate)

ここでは、「英語表現」と「プレゼンの力」が多く、8名全員がこの2つを選択している。フィードバックのコメントの内容がディベートの展開方法やその場合に必要となる英語の表現になることが多かったのも、それがそのまま反映された形になった。また、発音に関するコメントの有用性を感じた受講者が1名しかいなかったのは、フィードバックが文字であり、発音に関するフィードバック方法としては限界があったからなのかもしれない。

6. 【自由記述】Debateのfeedback(メッセージ(文字)で)について感想をお願いします。【一言でもいいのでお願いします】

「良かったところ、修正した方がよいところを詳しく伝えていただいたので、わかりやすかったです。」

「とても詳しくfeedbackしてくださったので非常に分かりやすかった。ひとりひとりについてのコメントもわかりやすく、記録として残るので見返すことができた。」

「いい所・改善点を具体的に示されることで、次回に役立てることができた。」

「多すぎず少なすぎず、適量のフィードバックでした。内容についても触れられていて、どのように改善すればよいのか把握し本番に挑めたのでよかったです。」

「feedbackを受けとった時には、自分がそのときどんな発言をしたのか、どんな表現を使ったのかを覚えていなかったため、もう少しはやくfeedbackを受け取れると良かったと思った。ただ、文字であったため、簡潔な内容になり、feedbackを受けるのに時間がかからなかった点は良かったと思った。」

「フィードバックを頂いて、指摘された点を意識してディベートに取り組めた。」

「自分ではよくできていた箇所でも、より伝わりやすい表現や発音があることを知ることができたため良かった。」

「ディベートの中では見えなかった自分たちの論の穴や、良かったところなど細かくフィードバックしてくださったので、自信にもなったし、改善してより良いものを作りたいとモチベーションがあがりました。」

(明らかな標記ミスなどは訂正してある)

全体的な傾向として、**Book Report** の感想と同様に自分で気づかなかったミスや弱点を指摘してもらえたことへの評価が目立つ。また、記録として手元に残る点を利点として挙げる回答者もいた。これはリアルタイム方式やオンデマンド方式にない利点である。

肯定的な回答がほとんどと言ってよいが、否定的な表現が一つだけあった。それは「もう少し早く **feedback** を受け取れるとよかった」というものである。その理由として回答者は自分がどんな表現を使っていたか覚えていなかったことを挙げている。文字での **feedback** は時間がかかるため、作成に時間がかかってしまったことは事実であり、今後改善しなければならない点である。また、リアルタイムやオンデマンド方式であれば、受講者は自分の英語を確認しながら授業者のアドバイスを聞くことができ、自分が使っていた表現を忘れるということにはならなかったであろう。

一方で、この回答者は、授業者のフィードバックが文字であったため、読むのに時間がかからなかった点を良いこととして挙げている。リアルタイムやオンデマンドだと、授業者が映像を見たり止めたりしてフィードバックをするので、その間ずっと聞いていなければならない。しかし文字だと読むのに時間がかからないというメリットもあるという指摘もあった。

4-5 授業者から見た長所・短所

長所は、リアルタイムではないので、受講者は時間を選んで確認することができる。また、文字情報なので、リアルタイム方式や後述するオンデマンド方式に比べ、短時間でフィードバックを読み取ることができる。

一方で、文字情報は読み飛ばしや誤読の可能性が高まるという短所もある。また、発音などのコメントには文字では情報を伝えきれない可能性がある。さらに、授業者にとって、時間的な負担が大きく、今回の3つのフィードバックの中ではもっとも時間がかかるフィードバック方法であった。

5. Mini Lecture (フィードバックはオンデマンド)

5-1 例年の実施方法

受講者が自分で選んだテーマについて簡単な「レクチャー」を英語で行う。テーマは「ディズニーランドはなぜ人気が続くのか」「チョコレートの歴史」「地元の祭」など、必ずしも堅苦しいものではなく、発表者が興味・関心のあるものを選んでいく。長さは5～10分程度である。

はじめに過去の受講者の映像を見せ（本人に許諾を得ている）、また、過去数年の受講者が扱ったテーマを紹介し、受講者各自が自分のテーマを決定する。テーマの決定に際しては、受講者一人ひとりと授業者がメールでやり取りをして決定している。

受講者は2～3週間をかけて英語によるレクチャーを用意する。授業の一部を使うこともあれば、授業外の時間を使って各自が進めることもある。その後、授業を使い、リハーサルを2回行う。1回目のリハーサルは3～4人一組で、複数の教室を使って行い、互いにコメントをしてその後の修正に役立てる。2回目

のリハーサルでも4人前後のグループ（第1回とは異なるメンバー）で実施し、グループ内で順番に発表し、互いに質問やコメントをする。発表の様子はビデオで撮影し、この映像を授業者が視聴してフィードバックを行う。フィードバックの内容は、文法、語法、発音のミスが中心で、それ以外に、よりよく伝える提案（話題の順序や内容の変更、情報の追加など）なども行った。手段はDebateと同じく「文字」である。コメントを書いて各自にメールで送信した。受講者はこれをもとに修正を加え、本番の発表へと進んだ。

5-2 リモート環境での授業方法

主な手順はリモート環境でも変わらないが、Zoomを使用したことで若干の違いはあった。まず概要を説明し、過去の映像を見せ（本人の許諾を得ている）、例として過去のテーマを示した。その後は各受講者と授業者がメールでやり取りをしてテーマを絞り込んでいった。ここまでは例年と変わらない。リハーサルを2回行った点、各回を2~3人で1つのグループを作ったという点も変わらないが、今回はリモートなので、ブレイクアウトセッションを使い、互いにコメントをした。2回目のリハーサルでは第1回とメンバーを変えて3人1組のグループを作り、再び発表をして互いにコメントし合った。その後、各自で手直しをし、修正版を授業者に送付した。例年は受講者が教室でレクチャーをし、その様子をビデオに撮っていたが、今回はリモート授業なので、受講者各自が撮影をして授業者に動画ファイルを送付した。受講者はビデオカメラ、スマホ、PCなどを使って動画を作成したようだ。すべての受講者がレクチャーにパワーポイントを使っていたためか、Zoomの録画機能を使ったと思われる例がほとんどであった。最終版はすべて授業者の動画をOne Driveにアップロードし、全メンバーに公開をした。受講者は各自で動画を選んで視聴することができた。

5-3 リモート環境でのフィードバック

第2回のリハーサル後に送ってもらった動画に対して授業者がフィードバックをした。コメントの内容は例年と変わらず、発音、語彙、文法、構成などである。今回の方法は、受講者の動画を再生しながら、アドバイスが必要なところで止め、授業者がコメントをした。この様子をPCの録画アプリで録画し、ひとつの動画ファイルを作成した。受講者が作成した動画は5~10分だが、フィードバックをした動画には授業者のコメントが入っているので、それぞれの約1.5~2倍の長さであった。その動画をOne Driveにアップロードし、受講者にURLを送付し、受講者が視聴した。このフィードバックをもとに各受講者は最終版を作成して提出した。

5-4 受講者の感想（アンケート結果）

Mini Lectureのフィードバックに関する質問を3つ用意した。それぞれの質問と回答は以下の通りである。

7. Mini Lectureのfeedback（録画を送付するオンデマンド式）はあなたの英語力（発音、文法、語彙、表現等）向上に役立ったと思いますか？



図5 Mini Lecture のフィードバックの有用性

9人中「大いに役立った」が5人、「どちらかといえば役立った」が4人で、回答者全員から肯定的な評価を得られた。

8. 【複数回答可】上記の7の質問で「大いに役立った」「どちらかといえば役立った」と回答した方への質問です。feedbackによりどの力が向上したと思いますか？「その他」の場合は具体的にお願いします。

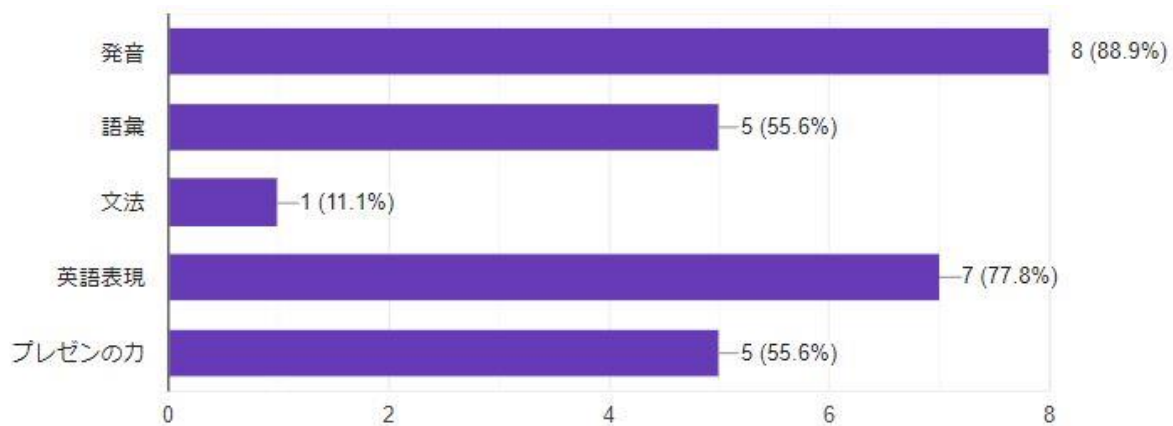


図6 役立った項目 (Mini Lecture)

「発音」「語彙」「英語表現」のように英語そのものに関わる項目のほかに「プレゼンの力」を回答した受講者も多くなっている。これは、実際に指導した内容を反映している。

9. 【自由記述】Mini Lecture のfeedback (録画を送付するオンデマンド式) について感想をお願いします。【一言でもいいのでお願いします】

「発音から英語表現まで、修正した方がいい理由も含めて教えていただいたので、勉強になりました。また、オンデマンド式だったので、自分が止めたいところで一時停止でき、時間がBook Reportよりも長いMini Lectureにおいては、ありがたかったです。そして、英語に関する事項だけではなく、プレゼンの展開

の仕方の良いところなどを伝えていただいたので、モチベーションが上がりました。」

「リアルタイムとは異なり双方向のコミュニケーションはないものの、動画を見ながらなので的確に改善点が見える。また、先生の話し方が実際にコミュニケーションしているみたいだったのでリアルタイムのように感じた。」

「わかりやすいプレゼン方法を知ることができ、改善して役立てることが出来た。」

「文字よりもどこについてのアドバイスなのかがはっきりするのでよかったです。また、何回か確認することができたことも自分のプレゼンテーションをより良いものにするにとっても役立ちました。」

「発音の改善するべき点を音声で確認することができ、自分のタイミングで動画を見ることができたのが良かったと思う。」

「自分なりにどのようにしたら効果的に伝えることができるかを考えてミニレクチャーを制作できた。」

「具体的な箇所を指した指導を受ける事ができたので、改善点を明確に把握することができた。」

「今回、ズームでの授業ということで、自分で作ったプレゼンを発表する機会がとても少なく、多くの人の意見は聞けませんでした。しかし、先生と一緒に自分のプレゼン動画を見返すことで、分かりにくいところ、文法のミスなど細かいところまで修正することができました。」

長所として、自分で止めたり進めたりできる、繰り返し確認できる、などのコメントが目立つ。また、文字によるフィードバックよりも好意的に受け止めている回答もあった。また、授業者の話し方が、実際に話しかけているようだというコメントは、フィードバックをするときのコツと考えてよいだろう。

5-5 授業者から見た長所・短所

受講者は自分の好きな時間に視聴できるという長所がある。リアルタイムの場合、事前にスケジュールを立てるとは言え、決められた時間に拘束されることになるが、オンデマンドの場合、隙間時間などを利用することが可能である。また、それは授業者が動画を作成する場合も同じで、夜間など、受講者と予定を併せることが難しい時間帯も使うことができるので、より柔軟に対応できる。また、文字に比べて音声面の指導がしやすいのはリアルタイム方式と同様である。そして、授業者にとって、文字でのフィードバックよりも時間的な負担が少ない。

一方で短所は、リアルタイムに比べて、受講者の意図を確認できないことがある。授業者がミスとして指摘した箇所に何らかの意図があった場合、それを確認できないままで終わる可能性がある。

しかし、総合的に見れば、長所が短所を大きく上回っており、授業が対面に戻った場合でも、この方式の継続が可能であると思われる。

6. 考察

異なる3つのフィードバック及び受講者の反応を紹介したが、いずれも肯定的な回答が多かった。ただし、今回は回答率が45%なので、好意的な回答をする受講者のほうが多かった可能性も否定できないので、解釈には注意が必要である。

また、どのような点が役立ったかについては、発音、語彙、表現などの英語そのものに関わるものやプレゼンのように英語力以外の力に関するものも目立った。

アンケートでは、さらに自由記述欄を設けた。3名からの回答があった。

10. 【自由記述】【ここは無回答でも構いません】その他、何かあればお願いします。

「個人的な時間を割いて、指摘をいただくことが、自分の英語の弱点を知ることにつながったと思う。今後、指摘された内容を意識して、よりよい英語を研究していきたい。」

「feedback の回数が多く、自分の発音や表現などの力を向上させることができたため、良かった。」

「正直なところ、feedback はなるべく Zoom 等によるリアルタイム形式の方が個人的にはありがたい。理由は上記にもあるように、英語での表現に対して、「どうしてその表現を選んだのか」をその場で伝えることができるからある（オンデマンドでは単にミスであると受け止められた状態での feedback がなされる可能性が相対的に高い）。」

ここでも、自分が気付かないミスを指摘してもらえたことが利点であったと述べられている。興味深いのは最後のコメントで、リアルタイムなら、「ミス」と判断された自分の表現について説明が可能だとしている。確かに、文字やオンデマンドによるフィードバックでは、授業者がその理由などに気づかないままコメントをする可能性があるため、注意が必要だろう。

これまでのデータや授業者から見た長所や短所をもとに3つのフィードバックを比較すると、受講者への有用度という面では大きな差はなかったと思われる。ただし、文字によるフィードバックの評価がやや低い。この点は、ライティングにおける動画のフィードバックと文字のフィードバックを比較した Cheng & Li (2020) と同じ傾向を示している。また、音声面でのフィードバックに文字は不向きであり、リアルタイム方式やオンデマンド方式のほうが適している。さらに、授業者の労力という点では、文字方式が他の方法より時間がかかった。これらを総合すると、音声を中心とする英語力向上を目的とする授業におけるフィードバックには、文字よりも映像によるフィードバックの方が適している可能性があるため、今後さらに検証していきたい。

7. おわりに

本稿はスピーキング活動におけるリモートでの3種類の授業方法とフィードバックについて、大学での実践と参加者の反応を報告した。3つの方法にはそれぞれ長所や短所があり、本稿ではそれらを整理し提示することができた。

リモートでのフィードバックが成立するには、受講者に一定のメディアリテラシーがなければならない。今回は急遽リモートでの授業となったが、それでも一定の成果を挙げられたのは、その段階で既に学生がスマートフォンなどの扱いに十分慣れており、動画の撮影する、動画をアップロードするなどの作業に困難を感じる事が極めて少なかったという背景があるだろう。また、インターネット上に様々な資料が公開されており、わからないことがあっても、すぐに検索して知識を得ることができる。例えば、動画のアップロードの説明も一通り授業内で行ったが、わかりやすく説明している動画も存在するので、それらも併せて紹介した。そのためか、他の授業を含めると300人近くいる筆者の受講者からアップロードの方法に関する質問はほとんどなかった。送信での小さなトラブル報告が数件あったが、簡単なアドバイスで解決した。また、SNS など対面以外での学生間のつながりがあるため、相談をしたり協力をしたりすることも可能であったと思われる。

また、Zoom のブレイクアウトセッションが使えたことが大きかった。これがなければ、今回はやりた

いことの半分もできなかったかもしれない。

本稿での報告事例はコロナ禍への対応から始まっているが、対面授業が再開されても、利用したい指導方法やフィードバックの手法を入手することができた。今後は様々な手法を使ってより効果的な指導法の開発に努めたい。

参考文献

Cheng, D., & Li, M. (2020). Screencast video feedback in online TESOL classes. *Computers and Composition* 58, 1-17.

及川賢 (2013a) 「ビデオカメラ映像を利用したフィードバック：英語力向上と授業力向上を目指して」

『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』12, 111-117.

及川賢 (2013b) 「ビデオを用いたフィードバック 大人数にオーラルイントロダクションを実践させる工夫」『英語教育』62-4 (7月号)。(大修館書店) .10-11.

及川賢 (2020) 「リモートで行う教員養成課程の模擬授業」『英語教育2020年10月別冊 英語教師のためのオンライン授業・動画配信ガイド』。(大修館書店) .26-27.

(2021年3月31日提出)

(2021年5月10日受理)